

平成20年度

長岡京市立中学校国際理解教育推進事業

米国マサチューセッツ州
アーリントン姉妹都市訪問
報告書

長岡京市立中学校国際理解教育推進協議会

中学生の 2008 年アーリントン訪問を終えて

長岡京市立中学校国際理解教育推進協議会
会 長 松 宮 功
(長岡京市立長岡第四中学校長)

ここに綴られた手記から、アーリントン滞在を経験した中学生の感性と本事業の成果の一端を読み取ることができます。

話題の多くは滞在期間の内容ですが、それを支えているのは、滞在に至る半年間の徹底した学習プログラムです。

「アーリントン滞在中の英語日記ノートを提出しなさい。」

これは、帰国後、関西国際空港から長岡京市に向かうバスの中で、遠山園栄氏（長岡京市教育委員会国際理解教育交流指導員）から出された指示です。半年間課されてきた宿題が、終了直前になっても続いていたことが、プログラムの一貫性と質の高さを象徴しています。

義務教育段階の生徒を単なる物見遊山ではなく、周到に準備された計画のもと、長期間の学習を経て姉妹都市に派遣する例を、私は他に知りません。

夢を叶えた 16 人の生徒の心には、国際性の種が蒔かれました。蒔かれた種は、自然に芽を出すわけではありません。誰かが世話をしてくれるわけでもありません。育てることができるのは自分自身です。将来、自分の力でそれぞれの花を咲かせてくれることを期待しています。

本事業の実施にご支援いただきました関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

2008(平成 20)年 5 月

目 次

中学生の 2008 年アーリントン訪問を終えて

- 1 団員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 3 日程詳細・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 4 生徒感想文・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 1

※今年度は訪問は例年通り行われましたが、来訪は中止となりました。

1 団員名簿

役員・引率者

役 職	氏 名	備 考
団長	松宮 功	長岡京市立中学校国際理解教育推進協議会会長
副団長	河下 徹弥	長岡第四中学校 教諭
コーディネーター	遠山 園栄	
生徒引率	キャサリン・ゴールトマン	

生徒

学 年	氏 名	備 考
2年	中西 祐樹	長岡中学校 男子
2年	高 百合絵	長岡第三中学校 女子
2年	中小路 千晶	長岡第四中学校 女子
2年	斎藤 大哲	長岡第四中学校 男子
3年	松本 優美	長岡中学校 女子
3年	三谷 大知	長岡中学校 男子
3年	八木 俊充	長岡中学校 男子
3年	中小路 萌	長岡中学校 女子
3年	森本 早貴	長岡第二中学校 女子
3年	増田 晃子	長岡第二中学校 女子
3年	石田 有里	長岡第二中学校 女子
3年	吉田 友里佳	長岡第三中学校 女子
3年	藤田 梨華	長岡第三中学校 女子
3年	蓮尾 礼奈	長岡第四中学校 女子
3年	前田 文彬	長岡第四中学校 男子
3年	辨崎 結奈	長岡第四中学校 女子 生徒リーダー

2 日程

月 日(曜日)		概 要
4月21日(月)	夕刻	・小田 豊 長岡京市長を表敬訪問 ・芦田 富男 長岡京市教育長を表敬訪問
4月26日(土)	午前 夕刻	・長岡京市中央公民館駐車場を出発 ・関西国際空港を出発 ・デトロイト経由ボストン 着 ・アーリントン 着 ・歓迎会(シニアセンター)
4月27日(日)	正午	・UU チャーチにて市民との交流
4月28日(月)	午前 午後 夜	・タウンホール訪問 市長を表敬訪問 ・レキシントン歴史博物館見学 ・コンコード見学 ・タウンミーティング見学
4月29日(火)	午前 午後 夕刻	・ボストン市内観光 ハーバード大学と州議事堂見学 ・クインシーマーケットで買い物 ・アーリントンケーブルテレビにて撮影と見学
4月30日(水)	午前 午後 夜	・アーリントン高校にて授業見学 ・ハーディ小学校にて生徒と交流 ・レッドソックス試合観戦
5月1日(木)	全日	・オトソン中学校にて授業体験と文化交流
5月2日(金)	午前 午後 夜	・ホエールワッチ 参加 ・ロックポートにて買い物 ・ボストンバレエ見学
5月3日(土)	午前 夕刻 夜	・ボストン美術館見学 ・さよならパーティ(シニアセンター) ・ハイスクールポップスコンサート 参加
5月4日(日)	午前	・ボストン空港 発 ・デトロイト経由
5月5日(月)	夕刻 夜	・関西国際空港 着 ・長岡京市役所 着

3 訪問日程詳細

4月21日(火)

17:30 出発に先立ち、長岡京市長・教育長を表敬訪問し、各自アーリントンへの友好訪問団員としての抱負を述べ、市長・教育長それぞれから親書を預かりました。



4月26日(土)

9:00 小田豊市長、芦田富男教育長、校長先生や保護者の見送りを受け元気に出発。



12:50 関西国際空港よりデトロイト経由ボストン・ローガン空港へ。
ノースウェスト航空 70 便に搭乗、デトロイトまで12時間の旅。
デトロイト発 NW386 便に乗り換え、ボストンまで約2時間の旅。



15:25 ポストン・ローガン空港着、アーリントンのスクールバスのお迎えで、ホストファミリーの待つシニアセンターへ向かいました。

17:00 シニアセンターにて、ホストファミリーと初対面。歓迎レセプションの後、それぞれホストファミリーの家に向かいました。



4月27日(日)

11:30 UUチャーチにて市民との交流会。長岡京音頭を一緒に踊りました。



4月28日(月)

10:00 タウンマネージャーのサリバン氏を表敬訪問。セレクトマンの会議室でアーリントン市の行政のしくみなどの説明を受け、小田市長からの親書を届けました。



13:00 レキシントンとコンコードへ、独立戦争の跡を見に行きました。
あいにくの雨のため、外へは出られず歴史博物館内の見学になりました。

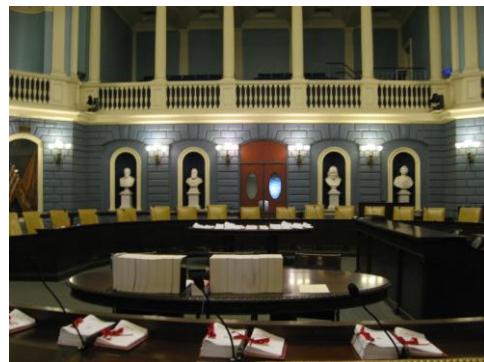


20:00 タウンミーティングを見学。今年の第一回目のミーティングでもあり、オープニングに、ミニッツマン（民間兵士）の衣装を着た人達の演奏を聞くことができました。



4月29日(火)

9:00 ハーバード大学と州議事堂の見学に行きました。州議事堂では、アーリントン出身の上院議員さんに館内を案内してもらいました。午後は、クインシーマーケットでショッピング。



17:00 アーリントンケーブルテレビの取材を受け、スタジオで収録しました。
収録中は「借りてきた猫」、カットの瞬間いっきに元気になりました！



4月30日(水)

8:30 ハーディ小学校で歓迎レセプション。「鳴子踊り」を披露しました。子ども達からは可愛い声で、スペイン語と日本語の歌のプレゼントがありました。



9:30 アーリントン高校の見学。クッキー作りや授業の見学をしました。



13:00 再び小学校へ戻り、授業体験。その後、日本文化交流で剣玉やこま折り紙などをして小学生達と交流しました。



19:00 レッドソックス試合観戦

フェンウェイパークでレッドソックスとトロント・ブルージェイズの試合を観戦しました。松坂先発、岡島継投そして9回裏サヨナラ勝ちという超ラッキーな試合を見ることができました！



5月1日(木)

8:00 オトソン中学校にて、シャドー（一緒に案内してくれる）の生徒と一緒に授業に参加。授業はさっぱりわからなかったけれど、なんとなくアメリカの中学生になれたような気がしました。



14:30 カフェテラスで、オトソン中学校の生徒との交流会。

「鳴子踊り」とビートルズの「Hello Good-by」「Let it be」、日本の歌「故郷」を歌いました。



日本の文化交流の時間には、「剣玉」「こま回し」「折り紙」の他「お習字」も披露し、オトソン中学校の生徒たちと楽しく交流しました。



5月2日(金)

8:00 グロウセスター港よりホエールワッチ船に乗りました。1時間ほどのクルーズの後、保護地区に入ると大きな鯨の親子を見ることができました。



13:00 ロックポートという美しい港町で、ホットドッグを食べた後、お買い物。



5月3日(土)

10:00 ボストン美術館見学。世界的に有名な作品を数多く所蔵しているボストン美術館を見学しました。



16:30 さよならパーティ (シニアセンター)

アーリントン市長、教育長はじめセレクトマンや上院議員の方に来ていただき、ビートルズの歌と「故郷」を歌いました。最後に参加者全員で「長岡京音頭」を踊りました。涙、涙のお別れでした。



19:00 ハイスクールポップスコンサートで最後の「鳴子踊り」を踊りました。
タウンホールの会場一杯の観客から、拍手喝采を受けました。



5月4日(日)

9:30 アーリントン高校から、たくさんのホストファミリーのお見送りで、
ボストン・ローガン空港へ向かいました。



12:05 NW385便にてデトロイト空港へ、NW69便に乗り換え一路日本へ。

5月5日(月)

18:25 日付変更線を通り、無事関西国際空港に到着。バスにて長岡京市へ。
20:15 長岡京市市役所到着。芦田教育長はじめ、各中学校校長先生や保護者など
多くの方々に出迎えていただきました。お疲れ様でした。



4 生徒感想文

長岡第四中学校 第三学年 辨崎 結奈 {Yuna}

今回アーリントンに行って一番楽しかったことは、どこかに行ったこと、とかではなくアメリカ人とコミュニケーションがとれたことです。

初めは、通じるか心配で、あまり自分からは話しかけませんでした。でも、アーリントンの人は、とてもフレンドリーに話しかけてきてくれました。私たち長岡京のメンバーと、ホームステイ先の子ども達が開けたのは、一つのゲームからだと思います。アーリントンに到着した次の日は「市民との交流の日」でした。私達は、ひとつの部屋で時間が来るのを待っていました。私達は、長岡京のメンバーだけで固まって喋っていました。その時、私たちと同じくらいのアメリカ人の子ども達が、「ゲームをしよう！」と、誘ってくれました。ルールは英語で説明してくれたので、よくわからなかったけれど、動作で教えてくれたので理解できました。一つの円になってゲームをしました。その時私は、「言葉がわからなくても態度で伝わるものなんだ」と思い、とても嬉しかったです。そこから、みんなが話しかけられるようになったと思います。ちなみにそのゲームは人気があり、毎日のようにやりました。

アーリントンの人達は、とてもがんばって日本語を覚えようとしてくれました。私たちが教えた日本語を、毎日繰り返して練習していました。その発音のおかしい日本語を聞くのが、私はとても嬉しかったです。日本の遊び「はないちもんめ」を教えて、みんなで手をつないで遊びました。とっても楽しかったです。

私が何よりも喜びを感じたのは、自分の言いたいことが相手に伝わった時です。不十分な英語でしたけれど、あきらめずに知っている単語を、たくさん使えば伝わりました。「どうにかなるものなんだなあ～」と思いました。帰る前日、何人かにメールアドレスを聞きました。文通はずっと続けていきたいと思っています。すぐには会えないけど、大切な友達！たった10日間だったけれど、たくさん友達ができ、友情も深まりました。アーリントンの人たちが日本に来た時は、自分が受けたフレンドリーな心で迎えてあげたいと思います。もっともっと英語を勉強して、いつかまた、アーリントンに行きたいと思っています。10日間、とても貴重な体験となりました。一生忘れることはありません。本当にありがとうございました。

長岡第四中学校 第三学年 蓮尾 礼奈 {Rena}

私は、ホエールワッチングの船の上で、みんなと遊んだことが、一番の思い出です。鯨を見られたことは、もちろん印象深かったけれど、ホストファミリーの子ども達と一緒に遊んだことが、とても楽しかったです。日本人、アメリカ人、男女もまったく関

係なく手をつないで、みんなでアメリカと日本の遊びをしました。あの時のことは、何よりも深く心に残っています。その次に心に残っていることは、帰国前日に参加した、ハイスクールのポップコンサートでの「鳴子踊り」です。夜も遅く、明日の荷造りも不安で、みんなとても疲れていたけれど、「アメリカで、みんなで踊るのは最後だから、今までで一番がんばろう！」と、今までで一番団結したときでした。この団結は、アーリントンに来るまでは絶対に考えられない事だったので、すごく嬉しかったです。声もよく出ていたし、Hiroは、今までで一番高く飛びました。最高の踊りだと思いました。

もう一つの思い出は、オトソン中学校でのシャドウイングです。一緒に連れていってくれた子は、ホストファミリーの子どもではなく、当日初めて顔合わせし、とても緊張しました。初めの一時間は、ほとんど何も話せなかったけれど、時間がたつにつれ、あちらもいっぱい話しかけてきてくれて、自分も伝えたい事が、自分で伝えられるようになってきました。とても良い経験になりました。

アーリントンに行って、食べ物や環境の違いはたくさんあったけれど、国の違いなんて関係なく過ごせて、自分も少しは成長して帰ってこられたと思います。想像していたよりもっとすごくて、楽しくて、みんなとても優しくかったです。ひとつひとつの経験はすべて心に残り、自分の世界が広がったような気がします。

長岡第四中学校 第三学年 前田文彬 {Fumi}

僕が今回アーリントンに行って一番多く学んだことは、「コミュニケーションの大切さ」だと思います。

アメリカでの第一印象は、乗り継ぎのデトロイト空港のマクドナルドで注文した時、店員の態度がとても悪く、品物も乱暴に投げられてしまいました。その反面、アーリントンではみんなとても親切にしてくれて、とても嬉しかったです。アメリカは、場所によってずいぶん違うのだということがわかりました。

そして、一緒に行った長岡京の仲間とも、新しい友情を築くことができました。僕は、正直なところ初めは「個性的な人が多くてやりにくいなあ・・・」とか「本当にやっていけるのかなあ・・・」と、心配でした。でも、一緒に勉強しているうちに、その人のいい所をたくさん見つけれられたし、アーリントンに行ってから、本当に必要な人たちだったのだなあ、と思いました。特に、YunaやSakiは大きな役割を果たしてくれたと思います。大切なことは、初めからこの人は苦手だとか決め付けず、その人のいい所を発見していくことだと思いました。

そして、アーリントンの人たちとは、英語でのコミュニケーションが、とにかく難しかったです。知っている単語を並べたり、ジェスチャーを使ったり（それも大変でしたが）、なんとか伝えることはできましたが、聞き取るのは大変でした。「相手の話も聞けないのに、コミュニケーションなんてありえない」と思いました。自分の無力さを知りました。

僕は、今回のこの貴重な体験を与えてくださった全ての人に感謝したいです。必ずもう一度アーリントンに行きます。そして、アーリントンでお世話になった全ての人に「Thank you!」と言いたいです。そしてできることならば、今回の同じメンバーで、また一緒にアーリントンに行きたいです。

僕にはまだ夢がありません。でも、今回の訪問の経験で、国際関係の架け橋になるのもいいな、と思いました。口ではいくらでも言えますが、これからは、もっともっと勉強して必ず夢を実現させたいです。

長岡第四中学校 第二学年 斎藤 大哲 {Hiro}

アーリントンに行って特に印象に残った体験は、中学校に行ったこと、とお別れパーティです。オトソン中学校では、ホストファミリーのジェレミーについて授業を受けました。みんなピアスや指輪やネックレスをして、授業を受けているのを見て、ちょっとびっくりしました。でも、みんなの授業を受ける態度は真剣で、しっかりノートを取って授業を聞いていました。アメリカが学校の授業で大切にしていることは、授業の形ではなく、生徒が自分で勉強しようとし、勉強の意味をわかっていることだと思いました。逆に日本は、自主的に受けようとしめない授業で、生徒が勉強の意味をわかっているなくても、授業態度や礼儀や上下関係など、人と人との関わりという形を大事にする授業をしていると思いました。アーリントンの中学校には、廊下に立たせる罰が存在し、驚きました。自分が悪いことをして困るのは仕方がないが、人を困らせることはあってはならない、という考えがあるからだと思いました。学校では、みんなフレンドリーで、初対面でまだ何の紹介もないのに「Hello!」と声を掛けてくれ、すぐ友達になれたので、とても楽しかったです。建物もとても広く色取りも豊かで、日本の中学校とは、スケールも華やかさも全然違うと感じました。日本は、学校は修行するところだ、と考えているが、アメリカは生徒がのびのびと自分で学ぶ楽しいところだ、と考えているからだと思いました。鳴子踊りの後は、「ウオー!!」という喚声上がり、アーリントンの中学生は、とてもテンションが高くノリがいいなあ、と思いました。自分がジャンプしたときも、大歓声上がり、とても嬉しかったです。でも、剣玉をたくさんの人に教えられなかったのが、少し心残りでした。

お別れパーティは、ホストファミリーや友達に、すごく良くしてもらい仲良くなれたのに、何も出来ずにすぐ日本に帰ってしまうという、悔しく虚しい心残りや、アメリカの友達と一緒にアーリントンに行った仲間達と、もう会えないんだなあ、という寂しい気持ちが、歌を歌っている時にこみ上げ、泣き出しそうになりました。でも、最後は悲しいムードで終わりがたくなかったので、お別れパーティを楽しもうと、がんばりました。

日本に帰る日に、ホストファミリー達と別れる時、「いつでも来ていいよ」と言ってもらえて、とても嬉しかったです。バスに乗る前、マットとルーに最後のお別れをしました。また悲しくなったけど、最後に「Thank you!」と気持ちを込めて言って、別れ

ました。彼らも日本にすごく興味を持っていて、日本語も勉強しているので、いつかまた日本に来た時は再会し、自分もアメリカに行って再会したいと思います。

アーリントンで色々な人たちと出会い、楽しい時間を過ごせました。この行事を企画してくださった長岡京市に、家族に、一緒に行ったメンバー達に、先生方に感謝しています。これからは、長岡京市とアーリントン、日本とアメリカをつなぐ架け橋となる役目を、果たしていきたいと思いました。こんなすばらしい行事に参加できて、自分のこれからの人生への、大きな経験になりました。本当にありがとうございました。

長岡第四中学校 第二学年 中小路 千晶 {Chiaki}

私はアーリントンに着いたとき、想像以上に日本と風景が違うことに驚きました。そしてホストファミリーに挨拶するとき、興奮と緊張で、言葉がでませんでした。相手に伝えたい気持ちだけで、カタコトの英語を一方的に喋っていたように思います。アーリントンの人々はとても親切で、慣れてくるにつれて会話らしくなり、楽しくなりました。ホストファミリーでの滞在、ハーディ小学校、オトソン中学校、アーリントン高校などの訪問、どこへ行っても温かく迎えてくださいました。「国際交流」と言うと難しいことのように思えますが、言葉や文化の違いがあっても、相手を理解しようという気持ちがあれば、心を通わせ色々な人々と交流することができることがわかりました。

今回の訪問で一番心に残っているのは、ホエールワッチです。船で一時間ほど沖合いにでると、鯨の群れに出会いました。いくつもの大きな胴体を見た時、まずその大きさにびっくりしました。そして、目の前で泳ぐ鯨は、すごい迫力でした。気持ちよく群れをなして泳ぐ姿や、時折見せる潮吹きは、大自然そのものでした。本やテレビではない感動がありました。自分の目で見て、ひとつひとつ確かめながら自分の物にできたと思います。私にとって「アーリントン訪問」は、日本での英会話レッスンから始まり、現地でのいろいろな人々との交流、そして大自然の感動、すべてが貴重な体験でした。この訪問を通して出会った友人や先生、そして支えてくださった多くの人々に、感謝いたします。これからもこの「感謝」の気持ちを忘れずに、今回の経験や絆を大切にしていきたいと思います。

長岡中学校 第三学年 三谷 大知 {Dai}

まるで、アーリントンが泣いているような雨だった。最後の日は、朝から日本に帰るのが嫌だと思っていた。なぜなら、ホストファミリーの人々が、僕達を最初から「家族」として接してくれたし、とても楽しかったからだ。

空いている時は、いつも卓球に誘ってくれたり、一緒にバーベキューをしてマシュマロを焼いたりしてくれた。日本では、焚き火でマシュマロを焼いて食べることはめったに

ないことだから、これも文化の違いだと思った。

また、クインシーマーケットやロックポートなどへ買い物に行った時も、ホストファミリーの子ども達が一緒に歩いてくれ、自分の事はそっちのけで、どういうものが欲しいか、どんなところへ行きたいかを一番に聞いてくれて、案内してくれた。

そして、一番良かったことは、やっぱりレッドソックスの試合を観戦したことだ。岡島や松坂の写真がとれたことも嬉しかったが、打撃練習のとき外野に飛んできたボールを僕のために投げてもらおうと、友達が必死でアピールしてくれたことだ。

結果的には投げてもらえなかったが、その気持ちだけで十分だった。

その後も、全員一丸となってレッドソックスを応援し、終わってみれば、松坂先発、岡島の継投そしてサヨナラ勝ちをし、みんな満足していた。

最後の別れの時は、もう一度アメリカに来たい、アメリカにずっといたいと思った。来る前は不安と期待でいっぱいだったが、帰りの飛行機では、心残りとも満足感でいっぱいだった。

長岡中学校 第三学年 中小路 萌 {Moe}

この10日間の旅は、長かったような短かったような・・・でも、中身は詰まっていたとても充実していました。その中でも一番印象に残っていて、今でもよく思い出すのは、アーリントンの子供達と一緒に遊んだことです。クインシーマーケットで買い物するとか、レッドソックスの試合を観戦するのも素晴らしかったけれど、大きな公園でみんなで走り回ったり、学校から一緒に帰ったり、普通の日常の生活が何より楽しかったです。楽しかったことが多かった分、お別れの時はとても悲しかったです。ホストファミリーの人たちがずっと笑顔で手を振り続けてくれて、もう涙が止まりませんでした。一生ここにいたい！日本に帰りたくない！本当に強くそう思いました。でも、いつか絶対にまたこの場所で会える、そう思えば涙も自然に止まりました。

ずっと前に行った旅行は、もうほとんど覚えていないけれど、この旅行は絶対にいつまでも忘れることなく、私の心の中に刻み込まれると思います。そして、いつかまた、同じメンバーでアーリントンに行けることを願っています。

長岡中学校 第二学年 中西 祐樹 {Yuki}

僕はアメリカに行った。当然日本語は通じなかった。目に入るもの、耳に入るもの、口に入るもの全てがアメリカだった。アメリカの景色、アメリカの英語、アメリカの食べ物、僕には全てが初めてだった。僕は感動した。外国には、こんなにも美しい場所があったのだと思った。日本はとても小さいことに気づいた。

僕が行ったのはアーリントンという町で、長岡京市の姉妹都市だ。僕は最初、家の大

きさに驚いた。隣の家まで何メートルとあるし、庭があり、中には地下室まであった。僕がホームステイで泊まるのは、バンドさんの家だ。ルイス君は僕の1つ上の学年で、とてもフレンドリーだった。だからすぐに友達になった。アメリカでは色々な事をして、色々な事を学んだ。その中で僕は、ボストンレッドソックスの試合観戦が一番楽しかった。フェンウェイパークの大きさにびっくりした。外野のスタンドからは、プレーしている人がとても小さく見えた。先発は松坂選手だった。松坂選手が出てきた時、フェンウェイパークは跳ね上がった。みんなとても興奮していた。自分が出すことのできる精一杯の声を出した。自分もアメリカ人になれたようで、とても楽しかった。みんなで作ったポスターを上げて、全力で応援した。途中では、岡島選手も出てきた。とてもラッキーだった。すごく楽しくて、楽しくて仕方がなかったアメリカ。でも、刻一刻とお別れの時が迫っていた。お別れパーティの日、ホストファミリーの人達に歌を歌った。すると今までアメリカで作った思い出が、頭の中に走馬灯のように写し出された。すると、突然心が締め付けられるようになり、声が震え始めた。みんなの顔をまともに見ることができなかった。アメリカには10日間しかいなかった。でも、アメリカが故郷のように思えて仕方がなかった。アメリカにずっといたいという気持ちがあった。アメリカで作った友達ともっといたいと思った。日本に帰ってからも、アメリカのことしか考えなかった。アメリカに行くこと決まってから、僕は一生懸命英語を勉強した。でも、アメリカではさっぱりわからなくて、くやしかった。しかし僕は、悔いは残らなかった。いろんな友達を作って、みんなと遊んで、アメリカで住めたことを、僕は誇りに思っている。一緒にアメリカに行った仲間のことを、僕は尊敬している。僕はこのアメリカで過ごした10日間を一生忘れない。

長岡中学校 第三学年 八木俊充 {Toshi}

今回のアーリントン訪問は、14歳の僕にとって忘れられない思い出と、数々の貴重な経験を与えてくれました。まず、英語が現地のホームステイの生活の中で基本となるので、僕の英語は通じるだろうか？今までに習った単語・文法で話ができるのだろうか？自分だけ会話に入れず困るのでは？など最初は不安ばかり頭に浮かびました。でも実際はそうではなく、ホストファミリーは、僕が一生懸命伝えようとする言葉を一生懸命聞き取ろうとしてくれました。文の意味や単語が分からなくて、聞き返したことも多く、その度に違う言い方で言ってくれたり、絵やジェスチャーで説明してくれたりしました。日常の生活の中で、「シャワー入った？」「どれを飲む？」「遊びに行こう」などの簡単な英語は、だいたい理解できていたと思います。また、食事の時や寝る前に「黙っていてもだめだ」と思い、家族のことについての紹介や友達の紹介、寿司についての話など、いろいろな話を自分からしていきました。この時も、ホストファミリーは僕の話そうすることを、耳を澄まして聞いてくれました。ホームステイが終わった今、文法は完璧でなくても通じるのだ、ということを知りました。多少文法がおかしくても

伝えたい語句や主語、動詞が明確なら伝わります。自分の話す英語が外国人に通じることはとても気持ちよく、嬉しかったです。また、現地のオトソン中学でシャドウイングをしたことも心に残っています。半日オトソンの中学生と行動し、授業も受けました。数学も理科も歴史も全て英語での授業なので、内容はあまりよくわからず、授業に参加して発言することはできませんでした。でも、生徒達は考えたことを積極的に発言していて、学習意欲や積極性が高いなあと感じました。

僕は今回アーリントンに行って、アメリカという国に対する意識が変わりました。もちろん行ったのはアメリカという国のほんの一部ですが、今まで持っていた「怖い」「大ざっぱ」などのイメージはまったく無くなりました。現地では、ホストファミリーも町の人みんな親切で友好的でした。ボストンへ行く前の空港で「アメリカを楽しんでくれよ」と言われた時は、本当に嬉しかったです。またアメリカでは、みんながマナーを心得ているように感じました。人を思いやる心、謝る心、人を褒める心。たくさんのやさしい心で支えあって生きているのでしょう。アメリカは多民族国家ということもあり、人を理解しようとするす温かい心が育っているのだと思います。それに比べて、日本では肩同士が当たっただけで舌打ちされたことを考えると、なんて冷たい人々がいるのだろう、とがっかりします。自分が良ければそれでいい、という考えは、アメリカの人々にはきっと考えられないようなことだと思います。日本でも、マナーを守れない人が考え直し、思いやりを持って行動すれば、もっと住みやすく、気持ちの良い国になると思います。これが、アメリカに行って感じた最も大きな日本との違いです。

アーリントンで過ごした10日間は充実していて、とても短く感じた10日間でした。ホストファミリーの皆さん、先生方、ありがとうございました。そして、日本とアメリカで出会えた仲間達、どうもありがとう！！

長岡中学校 第三学年 松本 優美 {Yumi}

私がアーリントンに行って、一番楽しいと感じたのは、ホストファミリーと出会い、英語で気持ちを伝えられたことです。私の英語はとても不十分で、電子辞書は手放せませんでした。でも、アーリントンには日本と違う場所がたくさんあり、そのひとつひとつを知っていくことは、私にとってとても幸せなことでした。外国の良いところはもちろん、日本の良いところもたくさん知ることができました。私のホストファミリーは、本当に優しい人々で、今思い出しても、私が過ごした10日間は夢のように幸せで、苦しかったり辛かったりする思い出は一つもありません。わからないことはたくさんありましたが、いつも簡単な英語やジェスチャーで、すべてきちんと説明してくれました。そして、伝えたいという気持ちを強く持つことができれば、文法がきちんとできていなくても、発音がきれいでもなくても、伝えることができることがわかりました。私は家でテレビを見せてもらいましたが、そこでの会話は、とても速くて全くわかりませんでした。そこで初めて、ホストファミリーの人たちが、どれだけ苦労して私の言葉を理解し

てくれようとしているのか、を知りました。そしてとても感謝しました。私はこの10日間で、以前は全くの赤の他人であった人々に、とてもお世話になりました。また、多大なご迷惑をおかけしました。私は、その人達に、もう一生出会えることはないかもわかりません。それでも、私はこの10日間の事を、これからもずっと忘れずに、同級生や後輩に、この旅はどれほど素晴らしかったか、ということやアーリントンの人々がどれほど親切にしてくれたか、を伝えていきたいと思います。

私には、これから高校や大学で英語を勉強できる機会がたくさんあります。アーリントンに行って、自分の語学力がとても乏しいことに気がつきました。ですから、今からしっかり勉強して、もう一度アーリントンの人々に恩返しに行くことを、これからの目標にしていきたいと思います。

長岡第二中学校 第三学年 石田 有里 {Yuri}

私がこの体験を終え日本に帰ったとき、たくさん伝えたいことがありました。それは、日本とアメリカの違いを知ったことです。違いとは、単に大きさ、生活といった目に見えてわかるものだけではなく、実際に体験して気づき、異なると感じたもののことです。例えば、私がアメリカに着いて飛行機から降り、気分が悪く椅子に座っていた時、近くにいたアメリカ人の若い女性が、心配して声を掛けてきてくれました。その後も、「何か飲み物や食べ物を持ってこようか？」などと尋ねてくれました。これは、大きな違いです。日本では駅のホームで人が倒れていても、声をかける人がいないどころか、誰も見向きもしないでしょう。一時は社会問題として扱われていたものの、今では常識になってしまっているところがあります。しかし、アメリカならそんな事は、考えられないのでしょうか。なぜなら私が体験したそこには、日本人が忘れてしまった優しさと、助け合いの社会があるからです。だからこの時、私はとても嬉しくて、同時に悲しかったです。そして、その行動が当たり前と思えるアメリカの人々を羨ましくも感じました。

日本に帰って現実を見た時、改めて日本の内側からの改革の必要性を、ひしひしと感じました。このことに気づいた私は、自らを変えていかねばならないのだと思います。そして私は、まだ知らない人には、自分で体験し、感じて気づいてほしいと思います。私は、今回の体験を通じて、アメリカを肌で感じました。私の中の小さな変化は一つだけ、自分の価値観が変わりました。これは、二つの世界を知ったからです。まったく違う生活をしてきた、自分達と同じ年齢の人達と交流したとき、互いに言葉も思いも十分に伝わらないのに、すぐに一緒に笑うことができました。一瞬、自分も普通のアメリカの中学生になったような気がしました。私が見た中学校では、日本の中学に見られるいじめはなく、一人一人の個性が輝いているように見えました。私は、この旅に参加する前、自分は何をしに行くのか、何を伝えに行くのか、が曖昧でした。それは、今でもはっきりとした形になった訳ではありません。感じた事を言葉にして伝えることは難しいことです。でもこの体験は私一人のものではありません。それに、私とまったく同じ

体験をした人はいないでしょう。だから、その体験を伝え、そしてもっと多くの人達がこの体験を自分で感じる事ができたら、そのさまざまな経験がこれからの日本人の貴重な貯蓄となるでしょう。私は、この貴重な体験をさせてもらったことを誇りに思うと同時に、これから私にしかできないことを、たくさん実践していこうと思います。

長岡第二中学校 第三学年 森本 早貴 {Saki}

私がアーリントンに来て、一番嬉しかったのは、やはり友達がたくさん出来たことです。話す事は大変だったけど、自分から一生懸命話したらちゃんと聞いてくれて、町のこと、遊びのことなど、色々なことを教えてもらいました。言葉は通じなくても仲良くできることがわかったし、日本に帰ってからもずっと友達でいたいと思っています。アメリカは日本とは全く違って、驚いたことがたくさんありました。例えば、トイレの鍵がついていなかったり、土足で家に入ったり、中学校ではチャイムがなかったり・・・とまどうことも多かったけれど、他の国の文化を知る事ができて、感心することもたくさんありました。文化交流会の時、一緒に折り紙をして、日本の文化に触れ、興味をもってもらいました。「Thank you!」と言ってもらえた時は、本当に嬉しかったです。今回の訪問では、本当にたくさんの人達にお世話になりました。ホエールワッチ、ボストンバレエ、レッドソックスの試合や学校見学など、簡単には体験できないことばかりでしたし、私の将来の道の数もグンと広がったと思います。私は、この訪問団のことをもっとみんなに知ってもらいたいし、アーリントンからの訪問団を受け入れ、日本のことを好きになってもらいたいと思います。アーリントンに、絶対にもう一度行きたいと思いました。みなさんに本当に良くしていただき、とてもたくさんの思い出ができました。この旅でできた友達を一生大切にしたいと思います。

長岡第二中学校 第三学年 増田 晃子 {Akky}

アーリントンでの10日間は、私にとって不思議な世界でした。当たり前のことですが、町の人みんな英語を喋っているし、みんなとてもフレンドリーでした。私がアーリントンで過ごした時間は、長かったようで短くて、濃くて充実した毎日だったなあと思います。

その中で、「一番楽しかったことは何か?」と聞かれると、これは即答で「ホストファミリーと過ごした時間」です。ホストファミリーとは、一緒に料理をしたり買い物に行ったり、おやつを食べながらおしゃべりしました。私と Chiaki の場合は特別で、ホストファミリーが2つありました。正直な気持ちを言うと、初めに1つ目のホストファミリーと、打ち解けてきた頃にお別れを言って、次のホストファミリーと、というのは少し嫌でした。でもどちらのホストファミリーとも、すごく私たちに良くしてくれて、

2つもホストファミリーを持って、今は心から良かったと思っています。2つ目のホストファミリーは2日間のハードスケジュールの時に世話になり、一緒に過ごせた時間はほんのわずかでした。だから、お別れしなければならない前日の夜、ホストファミリーのマリアとクリストファーと一緒にゲームをしようと、私たちの荷造りが終わるのを待って、深夜1時過ぎから眠たい目をこすってゲームをしてくれました。本当に嬉しかったです。

私は、どちらのホストファミリーと過ごした時間も、数え切れない程の優しさを感じました。また、私は「That's OK!」という言葉に何度も救われました。私が、どんな失敗をしても、いつでも「That's OK」と言ってくれました。例えば、買った服をトイレに置き忘れて店を出て、帰りがけに思い出しホストファミリーに伝えたら、店員さんに聞いて回ってくれ、見つかったら「良かったねえ～」と言ってくれました。私が「ごめんなさい」と何度も謝ると、何度も「That's OK!」と笑顔で返してくれました。でも、本当にすみませんでした。

アーリントンでの経験は、私の一生の中で大切な思い出になることでしょう。アーリントンに行けて本当に良かった。そして、いつか英語ペラペラになって、ホストファミリーに会いにアーリントンに行きます！！

長岡第三中学校 第三学年 吉田 友里佳 {Yurika}

私にとってこの訪問は、初めての海外旅行だったので、ドキドキワクワクもたくさんありましたが、その分不安もたくさんありました。でも、その不安を全て忘れられるぐらい、楽しいことばかりでした。

この訪問で、一番心に残っているのは、アーリントンの人達がみんな優しくしたことです。初めてホストファミリーの人達と会った時、まわりのひとが喋っている英語が全然わからなくて、すごく不安でいっぱいでしたが、ホストマザーが「Tired?」と聞いてくれました。知っている単語だったのですごく安心しました。

毎日の活動の中でも、一番思い出に残っているのは、最終日のお別れパーティです。たった10日間という短い期間でしたが、お世話になったホストファミリーやアメリカでできた友達と、お別れだと思うと、自然に涙がでてきました。

私が泣いていると、Eva と Amanda が私の所に来てくれて、キュッと抱きしめてくれました。そして、「Don't cry. I'll go to Japan next year.」と、言ってくれました。

みんなと別れるのはすごく悲しかったけど、また来年会えると思うと少し元気がでました。次に思い出に残っているのは、ホエールワッチです。鯨を見るのは初めてだったので、とても感激しました。そして、船の上でみんなと過ごした時間が、特に頭に残っています。アメリカのゲームをみんなでしたり、日本のゲームをしたりして、あっという間に、時間が過ぎていきました。それからは、日本の仲間とアメリカの友達がもっと仲良くなれた気がしました。その後食べたホットドッグも、すごくおいしかったです。

何もかもが初めてのことばかりで、とてもいい経験になりました。10日間がこんなに速いとは思ってもみませんでした。できればもっともっと長くいて、もっともっと友達をたくさん作って、もっともっと遊びたかったです。私が行く前に思っていた「言葉の壁」は、あるようではなかったように思います。言葉だけでは通じないこともたくさんありましたが、身振り手振りを交えたり、辞書を使ったり、いろいろな方法でコミュニケーションが取れました。この訪問で「英語が喋れるようになった。」とは言えませんが、行く前に比べたら、少しは喋れるようになったし、聞き取りもだいぶできるようになったと思います。最後に、私はこのメンバーの一員として、アーリントンを訪ねたことを本当に幸せに思います。

長岡第三中学校 第三学年 藤田 梨華 {Rika}

私は今回アーリントンに行って、たくさんの経験と、友達と、たくさんの良い思い出を作ることができました。アーリントンはすごくきれいな所で、そこに住む人達は、みんな良い人ばかりでした。

私を受け入れてくれたホストファミリーも親切な人達で、本当に良い家庭でした。

そして最も心に残る経験は、ホストファミリーのことです。最初、来て2日くらいは、あまりホストファミリーと会話をする事がありませんでした。

私とルームメイトは、食事や外出の時以外は、ずっと自分達の部屋にいました。家族の部屋にいても「Yes」「Thank you」など一言で、あまり自分の気持ちを伝えることができませんでした。でも、3日目くらいから、ルームメイトと話合って、家族と話してみようということになりました。電子辞書とかペラペラブックを持っていったら、ホストファミリーもたくさん話をしてくれました。この時、「話そう！」と積極的になることは、「すごく大事な事なんだ」と、私は思いました。

そして、7日目のホエールワッチは、とにかく楽しかったです。鯨は、とても可愛くて、船上では、みんなといっぱい話しをすることができました。アメリカ人の友達に「はないちもんめ」を教えて、みんなで遊びました。日本とアメリカで言葉はなかなか通じなくても、ジェスチャーや、いろいろな方法があります。たとえ言葉が通じなくても、「ああ、どうしよう？」などと、あきらめるのではなく、色々な手振りや、知っている単語を並べてみたら、言いたいことが伝わるかもわからないし、いつでも「オープン」でいることが大切だということを学びました。

8日目のお別れパーティ。「Let it be」を歌うと、今まで経験したことや学んだこと、楽しかったことがすべて頭に浮かんで来て、涙が止まりませんでした。親切にしてくれたホストファミリーや、友達と別れるのがすごく辛かった。でも、この10日間は自分にとってすごく、すごく良い経験になりました。これからも、メールのやり取りなどをして、アーリントンの人達と、またいつか会えたらいいなあと思います。

長岡第三中学校 第二学年 高 百合絵 {Yurie}

5月3日のホストファミリーデーの日、私はホストファミリーに病院に連れて行ってもらいました。なぜなら、私の将来の夢は、看護師になることです。だから、日本とアメリカの病院が、どんな風に違うのか知りたかったからです。けれども、病院の中は見学できず、病院の中にある博物館に、連れて行ってもらいました。そこは、昔あった病院の部屋で、120年くらい前の部屋でした。絵が飾ってあって、それは麻酔をしている写真でした。使っていた手術用の道具は大工が使うような物ばかりで、怖かったです。ちょっとでも、世界の病院を知ることができて良かったです。

私は、ホストファミリーと交流していく中で、たくさんのことを身に付けることができました。1日目、初めて出会ったとき、ホストファミリーの人が何を言っているのかほとんど分かりませんでした。けれども、日がたつにつれて何となく何を言っているのか、分かるようになりました。中学校で習っていないはずの範囲でも、聞き取れる単語を拾い集めていくとわかってきました。1週間だけで、こんなに違うことを感じました。

オトソン中学校に行ったとき、2人の日本人に会いました。その2人は、6年生の時に(2年前)アーリントンへ来たらしく、彼女達も初めて来た時、何を言っているのかさっぱりで、授業もただ座っている状態だったそうです。でも、1年・2年とたつて、やっと今、英語が喋れるようになり、すごく楽しいと言っていました。その時、私ももっと英語を勉強したいという気持ちになりました。他に、身に付けたことは、友達とのふれ合いです。アーリントンの人達は、みんなフレンドリーで、すごく過ごしやすかったです。1日学校を見学しただけでも、とつてもたくさんの人達に喋りかけられたし、握手もしました。日本とは違うなあ、と思いました。男女もすごく仲良くて、とても楽しそうでした。

アーリントンに来て、少し悲しかった(?)ことは、店員の態度です。日本の店員はいつも笑顔で優しいのに、アメリカは相手の気持ちが読めるほど、態度がはっきりしていました。ホストファミリーと、スーパーマーケットで買い物をしている時、すごく怖そうな人がいました。話しかけてもすごくムスっとしていたので、私はホストファミリーに「なぜ彼は怒っているの?」と、聞くと「いつもの事だよ!」と、すごく軽そうに言いました。日本だったら、クレーム殺到だと思いました。でも、みんな意見がはっきりしているから、フレンドリーになれることもあるのだろうか、と思いました。

アメリカに来て思った事は、とにかく「思った事は話す!」、その英語が間違っている、とりあえず「話して相手に気持ちを伝えていく」事が大切なのだと思います。